

夢風便り

ゆめかぜだより

Volume

1

特集

浜松医療の あけぼの 「七科約説」とその時代

遠州偉人列伝

全米を熱狂させた「Zカーの父」
片山 豊

ワンデイ・トリップへの誘い 掛川





創刊メッセージ

地域の夢に、追い風を。

活力ある都市部から北へ行くと緑豊かな山間地、南へ行けば遠州灘の美しい海岸線。風光明媚な浜名湖と、天竜川上流の山村に伝わる貴重な伝統文化。私たちのふるさと、浜松・磐田は全国に類のないほどの多彩な魅力をもつユニークな地域です。

このような地域に誕生した「浜松いわた信用金庫」は、令和の新しい御代に、希望あふれるフロンティアを求めて大きく羽ばたこうとしています。

私たちのコーポレートメッセージは「あなたの夢に、追い風を。」です。「お客様一人ひとりの夢に追い風を吹かせることで、明るい未来を届けたい。お客様の夢を大きく膨らませ、暮らしや経営、そして地域を活性化していく」という願いを込めています。

このたび、その地域への想いを形にした地域情報誌「夢風便り」を創刊いたしました。「夢風便り」創刊号では、地域の歴史・文化・自然、元気印の企業や人たちなどを幅広く紹介しています。この浜松・磐田地域には、これからの時代を切り拓く“未来の種”がまだまだ数多く眠っています。

「夢風便り」は、こうした浜松・磐田地域ならではの魅力を様々な観点から取材・発掘し、発信してまいりますので、ご愛読のほどをよろしくお願い申し上げます。

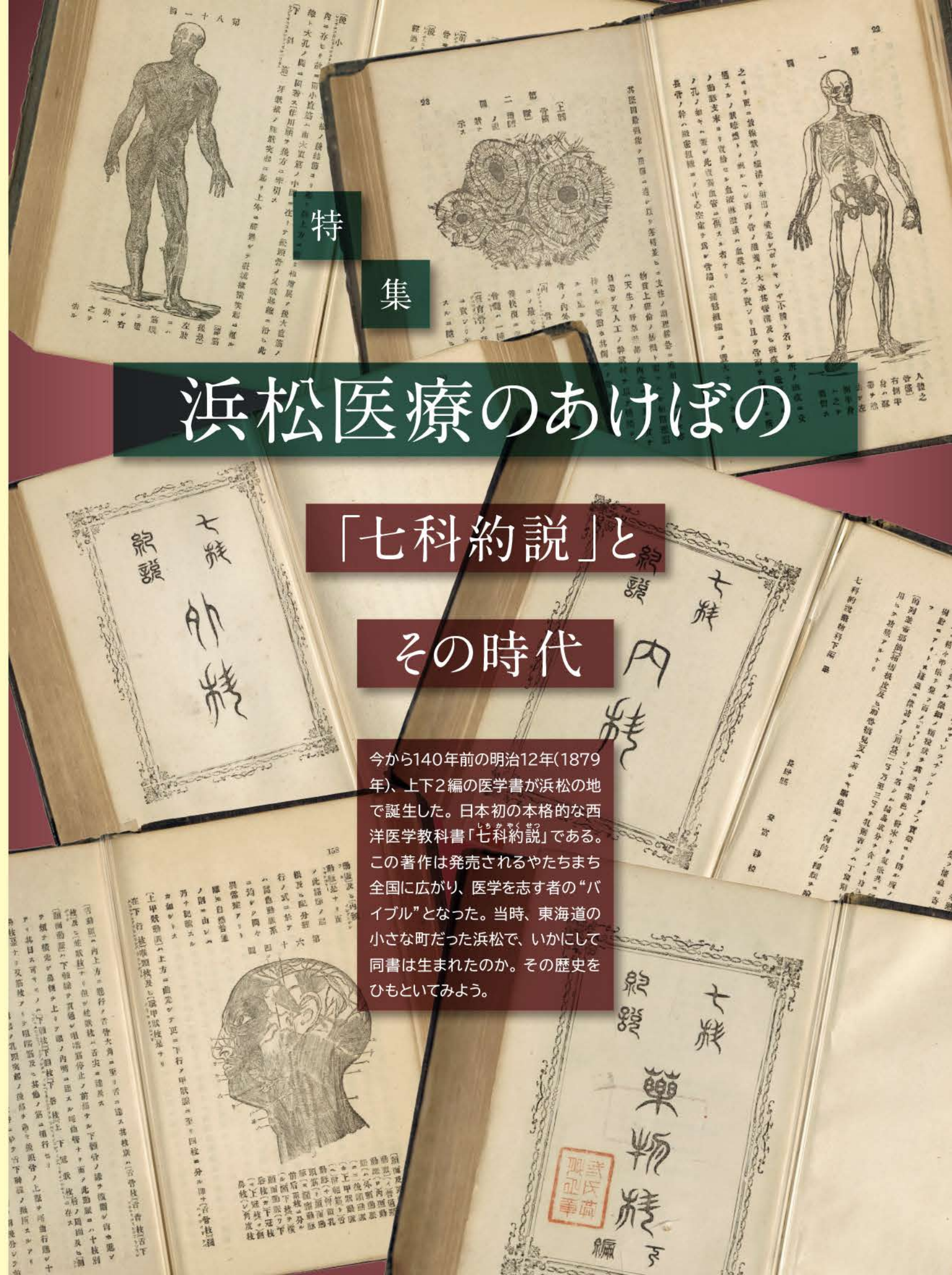


Contents



- 2 創刊メッセージ
- 5 特集
浜松医療のあけぼの
「七科約説」とその時代
- 12 遠州偉人列伝
全米を熱狂させた「Zカーの父」
片山 豊
- 16 輝く未来人
浜松市 塚本好陽さん
- 18 ワンディ・トリップへの誘い
ようこそ、緑の世界へ
自然の温もりを満喫する旅 in 掛川
- 23 I Love Hamamatsu! 浜松大好き!
ブラッドリー・ローデンさん
- 24 われら夢風カンパニー
File: 01 静香園製茶株式会社
File: 02 産後ケアセンター 1010HOUSE(トトハウス)
- 28 いきいき悠々倶楽部
磐田市 松田智光さん
- 30 地域に贈る夢と風
- 32 未来に残したい遠州遺産
浜名湖のみおつくし

令和元年6月発行(年2回発行)
 発行 浜松いわた信用金庫
 浜松市中区元城町114-8
 053-401-1812
<https://hamamatsu-iwata.jp/>
 編集・制作 株式会社メディアトーク



特集

浜松医療のあけぼの

「七科約説」と

その時代

今から140年前の明治12年(1879年)、上下2編の医学書が浜松の地で誕生した。日本初の本格的な西洋医学教科書「七科約説」である。この著作は発売されるやたちまち全国に広がり、医学を志す者の“バイブル”となった。当時、東海道の小さな町だった浜松で、いかにして同書は生まれたのか。その歴史をひもといてみよう。

日本初の本格的な

西洋医学教科書は、

ここ浜松の地に

誕生した。

▼「七科約説」発行を主導した太田用成



江戸時代の町並みがそのまま残る人口わずか1万2000人の宿場町。それが明治初期の浜松の姿だ。まだ東海道線は開通しておらず、もちろん浜松駅など存在しない。そんな時代に登場した「七科約説」とは、一体、どのような書物だったのだろうか。

そもそも、この本の刊行が計画されたのは明治7年(1874年)頃。発案者は、当時の県立浜松病院院長で、浜松医学校校長を兼務していた太田用成と



◀翻訳の中心人物である虎岩武

いう人物だ。太田は信州飯田(現在の長野県飯田市)の生まれ。幕末の頃、開港して間もない横浜へ行き、米国人医師について数年間、医学と英語を勉強した。その後、帰郷して医業を開始。名医とうたわれ、浜松病院開院の際には初代院長として招かれた。

この頃、太田はある問題に頭を悩ませていた。それは、明治8年から始まる国の医術開業試験にどう対処するか、という問題だった。

「今までの医者は漢方医が主流だったが、医術開業試験の導入により、新規に開業する医者は西洋医学の知識が必須になった。試験の科目は、解剖、生理、化学、薬物、内科、外科、産科の7



◀太田とともに翻訳を監修した柴田邵平

科目。しかし、これら7科目を網羅する教科書は、日本にまだない。さて、どうやって生徒たちを試験に合格させればいいのか…。当時30歳の若き太田校長は、来る日も来る日も、そのことを考え続けていた。

そんなある時、太田は横浜で医学修業をしていた時のついでで、英語で書かれた1冊の医学書を入手する。その医学書のタイトルは「CONSPECTUS OF THE MEDICAL SCIENCE(医学概要)」。著者は米ペンシルバニア大学教授のヘンリー・ハーツホーン博士だった。その本は、まさに医術開業試験の7科目を取り上げたもので、太田は一目見るなり小躍りした。「これを日本語に翻訳すれば最高の教科書になるぞ!」。

だが、しかしである。ハーツホーン博士の原著は1000ページ以上の大著で、中身は当然ながら英語の専門用語がぎっしり。当時の西洋医学といえば、まだまだ「蘭学」が主流であり、英語の



▲高度な技術で印刷に貢献した鞍智逸平

医学書にはなじみがなかった。いくら米国人医師に師事した太田といえども、これを完璧に翻訳するのは並大抵のことではない。「さあ、どうしたものか…。」太田は再び、頭を抱え込んだ。

そんな太田の前に「救いの神」が現れたのは明治9年(1876年)春のこと。浜松に、大学東校(後の東大医学部)を卒業したばかりの青年医師がやってきた。その医師の名は虎岩武。太田と同様、飯田出身の虎岩は大学東校に進学する前、太田の医学塾に学んでいた。太田門下の俊秀である虎岩は、大学卒業を恩師に報告するため、はるばる浜松を訪れたのだった。

「おお、虎岩君!よくぞ来てくれた!」。太田は虎岩の顔を見るなり、そう叫んだ。そして、「ぜひ浜松にとどまり、医学校教員兼医局員となってたまえ」と懇願。虎岩が快諾すると、太田は「実はもう一つ、君に頼みたいことがあるのだが…。」そう言って、虎岩に1冊の本を差し出す。それはもちろん、ハーツホーン博士の「CONSPECTUS OF THE MEDICAL SCIENCE」だった。虎岩は目を輝かせながらその本を受け取り、太田に言った。「先生、これを翻訳するわけですね?面白いじゃないですか。ぜひ、やらせてください」。太田は、頼もしい助っ人の手を握り、「よろしく頼む」と頭を下げた。

3人の医師の英知を集め 困難な翻訳作業に挑む

こうして浜松で職を得た虎岩は、病院と医学校にほど近い神明町の老舗薬局・小西屋の一隅に居を構えた。そして、普段は医師・教員として勤務し、空いた時間に翻訳の作業に励むという多



▲革張りで装丁された「七科約説」上下編と要約版(一番上)



▲原著を執筆したヘンリー・ハーツホーン博士

忙な日々を送る。しかし、難解な医学書の翻訳には極度の集中力が必要であり、職場や自宅ではどうしても気が散るのが虎岩の悩みだった。思いあぐねた虎岩が小西屋の主人に相談すると、主人は「それなら、ちょうどいい場所がある」という。「ただしね」と主人はいたずらっぽく笑った。「若い先生には、少し刺激が強いかもかもしれませんよ」。

そう言われて紹介されたのは、当時、伝馬町にあった遊郭「寿山楼 島屋」

の離れ座敷。さすがの虎岩もこれには面食らったが、「ここなら外の世界と隔絶されているし、誰も訪ねて来ない。よし、頑張るぞ!」と思い直し、翻訳作業に没頭した。

この話を伝え聞いた太田は「ふふふ」と苦笑し、「真面目な彼なら、多少の三味線の音や白粉の匂いは気にならないだろう」とつぶやいた。とはいえ、膨大な翻訳を虎岩一人に担わせるのはあまりに気の毒だ。「もう一人、助っ人が必要だな」。そう考えた太田は、当時51歳のベテラン教員に白羽の矢を立てる。その教員こそ、漢方や西洋医学に精通し、臨床経験も豊富な柴田邵平。尾張国笠寺村(現在の名古屋市)出身の柴田は、翻訳において、太田、虎岩に次ぐ第三の立役者となる。

翻訳の役割分担は、大部分の作業を虎岩がこなし、太田と柴田がそれを監修し、こなれた表現に直していくというものだった。この中で、太田、柴田のベテラン医師がとくに気を付けたのは、できるだけ直訳を避け、日本人に意味が通じやすい表現を採用すること。ま



▲鞍智が手掛けた人体図は、木版とは思えない精密さで彫り上げられている

た、それぞれの名詞には原語をカタカナで併記し、他の文献でも原語の意味を確認できるよう心掛けた。そのほか、簡略化されすぎて意味のわかりにくい原著の表現は、他の医学書から引用する形で言葉を補っている。

原著に勝るとも劣らぬ 精密な木版挿絵の技

3人の医者懸命な努力によって、翻訳作業がようやく終わりに近づいた頃。「さあ、これからよいよ印刷の準備に取りかかるぞ」と太田は宣言した。太田は、虎岩、柴田の顔を見ながら、こう言った。「どうせ印刷するなら、本場西洋の医学書に負けないような立派な装丁にしよう。それを可能にする人物は、浜松にたった一人しかいない。開明堂の鞍智逸平君だ。」

開明堂は、明治6年(1873年)、当時の浜松県御用達の製版所として旅籠町に創業。県庁から舶来の印刷機の払い下げを受け、近代的な活版印刷の技術を誇っていた。その一方で開明堂主人の鞍智は、日本古来の繊細な木版の技

を得意とする超一流の彫師だった。

太田は鞍智に原著を見せながら問いかけた。「この本には、精密な人体解剖図などの挿絵が合計477点も掲載されている。これらを再現することはできるかね」。鞍智は原図を凝視しつつ、しばらくじっと考え込んでいたが、やがてきっぱりと言った。「わかりました。浜松の職人の誇りにかけて、ご満足いくものを彫り上げましょう。」

それぞれの知恵と技が結集した翻訳書は「七科約説」と名付けられ、明治11年(1878年)5月、まず上編が出版された。翌明治12年4月には上編の改訂版と下編が同時刊行され、医術開業試験に完全対応する教科書が日本で初

めて完成した。本はA5版で、革製本の金文字入り。上編926ページ、下編1150ページの大作となった。本の随所には鞍智入魂の木版挿絵が挿入され、その出来栄はエッチングによる銅板印刷に勝るとも劣らない精密さだった。

価格は、上編が3円80銭、下編が4円50銭。当時は米1俵(60キロ)がおおよそ2円、学術書が1冊1円以下が相場であり、上下合わせて8円30銭の「七科約説」は破格の高値だった。それでも、全国の医師および医学生は「こんな素晴らしい医学教科書を買わない手はない」とばかりに、争うように「七科約説」を購入した。

こうしたブームの火付け役となったのは、当時、東京で出版されていた各種の医学雑誌だった。そのうち明治12年4月発行の雑誌は、「七科約説」を推奨する一文の広告記事を掲載する。この広告の名義人は丸屋善七、つまり現在も高名な丸善書店の創業者だ。丸善のお墨付きもあって、「七科約説」は長く医学界で重宝され、発行部数は初版・再版合わせて上編2800部、下編2500部、合計5300部という医学書としては異例のベストセラーとなった。維新から間もない浜松で誕生した「七科約説」は、豊かな知識と職人技が融合した「奇跡の書物」といえるだろう。



▶上編の最初に掲載された「解剖科」の扉ページ

全国有数の

医療先進都市・浜松。

その偉大なルーツは

ここにある。



▲会社病院の設立に尽力した小川清齋

浜松地方における医療の近代化。それは、明治6年(1873年)3月、紺屋町に設立された「会社病院」にルーツがある。そのきっかけをつくったのは、元静岡藩の医師で、磐田の中泉郡政役所に勤務していた小川清齋という人物だった。当時は「浜松県」の時代であり、県令(現在の県知事)は改革に積極的なことで知られる林厚徳。小川は林県令に申し立てた。「地域の人々を病氣から救うためには、正しい医療が必要です。今こそ近代的な病院をつくらな

ければなりません。」

井上がそう訴えるのも無理はなかった。幕末から明治に移り変わったばかりのこの時期、西洋医学は徐々に世の中に浸透していたものの、一般庶民にはまだまだ縁遠い。昔ながらの町医者にかかるか、祈祷やまじないに頼るしかないのが実情だった。そんな状況を憂える井上の上申を受け、林県令は会社病院の設立を決断。県民に対し「今後は病氣になったらまじないなどに頼らず、会社病院で正しい診療を受ける

ように」との布告を出した。

ちなみに会社病院という名称は、現在でいう企業病院のことではなく、「医療法人」としての病院を意味する。このため病院設立に当たっては、県からの融資に加え、地元の有力な実業家らが出資した。主な出資者は、三方原開拓のパイオニアとして知られる気賀林、著名な銀行家の平野又十郎、磐田の篤志家で社会貢献活動に尽力した青山宙平(孫はパナマ運河建設で有名な青山士)ら。まさに、浜松・磐田地域の

▶昭和6年に撮影された旧浜松病院付近の空撮写真。画面右下の細長い建物が病棟、その左の2階建が病院本館だった建物と推定される



そうそうたる経済人が名を連ねている。

地元経済界が結集して設立した会社病院は、翌明治7年(1874年)1月、県営に移管。同年4月には利町の五社神社近くに病院本館が新築され、「浜松県立浜松病院」となった。これに併せて附属浜松医学校も設置され、初代院長・校長に太田用成が着任したのは、前項ですでに紹介した通りである。

経費節減を理由として

病院、学校は相次ぎ閉鎖

県立浜松病院は、医局、薬局、俗務局(事務局)の3局で構成され、発足当初から本格的な西洋式医療を患者に施した。そうした医療活動を担ったのは、「七科約説」を翻訳した太田、虎岩、柴田の3医師だけではない。副院長の中島照という医師も、太田を支えて浜松の地に近代的医療を根付かせた。元尾張藩御殿医の中島は、「衛生雑記」とい

▼浜松市役所として利用されていた頃の旧浜松医学校校舎(写真提供:仲谷保治氏)



う月刊誌を編集。地域の人々の衛生観念の向上、健康を増進するための啓発活動を展開した。

また、明治10年(1877年)には浜松病院の医師たちが連名で「浜松病院医会」設立の建議書を県に提出し、4月に設置が許可された。この医会は、医師の研修、衛生思想の普及実践を図るとともに、現在の保健所のような機能を併せ持っていた。

一方、附属の浜松医学校は、明治9年(1876年)5月、紺屋町に専用の校舎が新築された。当時、病院に医学校が併設されたケースは静岡県内で他に例がなく、浜松らしい先進的な取り組みだったといえるだろう。

医学校の生徒は、本科生(16~25歳)、級外生(予科、14~17歳)、員外生(26歳以上)に分かれ、全生徒数は40名。カリキュラムは、第1級(内科学、臨床医学)、第2級(外科学)、第3級



▲浜松病院、医学校があった付近の略地図

(病理学)、第4級(薬学)、第5級(解剖学、生理学)、第6級(化学)の6段階に分かれていた。まさに「七科」をカバーする充実した内容であり、指導に当たる教授陣も、太田、虎岩、柴田らの豪華メンバーである。

ちなみに月謝は50銭だったが、運営費の大半を県の予算で賄っていたため、本科生は学費免除。級外生も半額負担で学ぶことができた。

しかし、このような至れり尽くせりの教育は、やがて県財政には大きな負担となっていく。浜松県が静岡県に吸収され、浜松独自の予算を確保しにくくなったせいもあってか、医学校は明治13年(1880年)、経費節減のため廃校となってしまった。

開校から、わずか4年で終わってしまった先進的医学教育の夢。それでも、残された校舎は行政庁舎としてその後も活用された。戸長役場、浜松町役場を経て、明治44年(1911年)の市制移行後は浜松市役所となっている。左ページの写真は、市制施行の前日に撮影された町役場職員の記念写真で、背後にあるのが旧医学校の校舎。この建物は、大正7年(1918年)に図書館建設のため取り壊されるまで、7年間にわたり市役所庁舎の役目を果たした。

これに対し、浜松病院は医学校の閉鎖後も存続していたが、こちらも経費節減を理由として明治20年(1887年)に廃止。この後、病院の建物は浜松中学校(現在の浜松北高)の寄宿舎、浜松商工会議所、市役所分室、中島飛行機の事務所などに使われた。だが、建



▲地域の人々の大きな期待を受け、設立された浜松医科大学の全景(写真提供:浜松医科大学)

物は第2次世界大戦の空襲で焼失。現在、その跡地は浜松復興記念館となっており、往時の面影は昭和6年(1931年)撮影の航空写真(9ページ下)でし

「無医大県」の静岡に 待望の医科大学が誕生

やがて月日は流れ、浜松病院・浜松医学校の設立からちょうど100年後の昭和49年(1974年)。三方原台地東端の緑豊かな一角に、静岡県内初の医科大学として「浜松医科大学」が開学した。長らく「無医大県」だった静岡県にとって待望の開学だったが、その舞台裏では浜松市と静岡市による熾烈

な「誘致合戦」が演じられていた。「医大を設置するなら、当然、県庁のある静岡市だ」「いやいや、県下一の産業都市である浜松市こそふさわしい」。県議会では西部出身議員と中部出身議員が鋭く対立し、互いに一歩も譲らな

なかった。結局、浜松市が静岡市に先行して用地を取得し、また当時の竹山祐太郎県知事が磐田出身だったこともあ

って、浜松市に軍配が上がる。浜松医大は昭和52年(1977年)に医学部附属病院を開設。これ以降、地域の医療水準は飛躍的に向上した。さらに、聖隷福祉事業団が聖隷浜松病院、聖隷三方原病院という私立の総合病院を整備したことなどにより、浜松は全国有数の「医療先進都市」へと発展して

いくことになる。今から140年以上前、医療の未来を信じて種を蒔いた先人たちの夢は、今、大きく花開いた。その偉大なさがけとなった浜松病院と医学校の歴史は、後世に永く伝えていくべきだろう。

(取材協力・写真資料提供:伊東政好氏、小粥章司氏)



◀浜松病院の跡地は浜松復興記念館となっている